

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第35集

都於郡城跡発掘調査概要報告書Ⅱ

2003

宮崎県西都市教育委員会

序

西都市教育委員会では、都於郡城跡の性格や機能を明確にし、さらに、保存整備計画を策定するための資料とすることを目的とした発掘調査を年次的に行うことについたしました。本年度は、ニノ丸跡の発掘（確認）調査を実施いたしましたが、本書は、その発掘調査の概要報告であります。

今回の調査で、虎口に関連した遺構をはじめ多数の円形柱穴や溝状遺構等を検出することができました。

これらは、都於郡城跡の変遷を含め、都於郡城跡を解明するためには極めて貴重なものであり、大きな成果を得ることができました。

本報告が考古学の研究のみでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための資料となれば幸いと存じます。

なお、調査にあたってご指導・ご協力いただいた宮崎県教育庁文化課をはじめ、発掘調査・整理作業にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に衷心から感謝申し上げます。

平成15年3月31日

西都市教育委員会

教育長 黒木康郎

例　　言

- 本書は、西都市教育委員会が国庫補助を受け、平成14年度に実施した都於郡城跡発掘調査の概要報告である。
- 調査は、西都市大字荒武字都於郡に所在する都於郡城跡を対象に行った。調査期間は平成14年7月2日から平成15年1月9日である。
- 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
- 発掘調査及び図面作成等については養方が担当した。
- 本書の執筆・編集は養方が行った。
- 本書に使用した方位はFig. 2・3 は平面直角座標系第・座標系であり、その他は磁北である。
- 本書に使用した標高は海拔絶対高である。
- 報告書に用いた色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の『新版標準上色帳』に準拠した。

目　　次

| | |
|-----------------|---|
| 第1章 序説 | 1 |
| 第1節　調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節　調査の体制 | 1 |
| 第2章 都於郡城跡の概要 | 2 |
| 第1節　遺跡の位置と歴史的環境 | 2 |
| 第3章 調査の方法と概要 | 4 |
| 第1節　調査区の設定と概要 | 4 |
| 第2節　調査の記録 | 4 |
| 第4章 まとめ | 8 |
| 報告書抄録 | 8 |

挿　図　目　次

| | |
|--------|--------------------------------------|
| Fig. 1 | 都於郡城縄張り図 |
| Fig. 2 | 都於郡城跡周辺位置図 (S = 1 / 50,000) |
| Fig. 3 | 都於郡城跡（五城郭）現況及びトレンチ位置図（平成13・14年度） |
| Fig. 4 | ニノ丸跡トレンチ内遺構図（平成13・14年度）(S = 1 / 800) |
| Fig. 5 | 第6・7トレンチ遺構平面図 (S = 1 / 100) |
| Fig. 6 | 第5トレンチ土壙断面図 (S = 1 / 40) |
| Fig. 7 | 出土遺物実測図 (S = 1 / 2) |

図　版　目　次

| | | |
|-------|---------------------|-----------------|
| PL. 1 | 1. 都於郡城跡全景（空撮） | 2. 二ノ丸跡全景（空撮） |
| PL. 2 | 3. ニノ丸跡トレンチ遺構分布状況 | 4. 第5トレンチ土壙検出状況 |
| PL. 3 | 5. 第6トレンチ虎口闇連遺構検出状況 | 6. 出土遺物 |

第Ⅰ章 序 説

第1節 調査に至る経緯

都於郡城跡については、市民の文化財に対する意識の高まりとともに、保護及び保存整備の声が高まり、昭和64年には保存整備構想策定を目的とした確認調査を行っている。しかし、この調査は樹木間でのトレンチ調査であったことから、柱穴群等は検出したものの建物跡を特定するには至らず、城の性格及び機能を明確にすることはできなかった。

また、平成4年度から6年度にかけては、山城本来の姿を復元することを主にした整備が行なわれているが、法面を中心に全面的に樹木を伐採しての整備を行なったことから、急勾配の法面のバランスが崩れ、さらに、樹木の根茎が腐食したことにより、法面の支持力が低下し、自然災害等による法面の崩落や亀裂が顕著になってきている。この整備は、工法的に都於郡城跡の保存に悪影響を及ぼす結果となってしまい、年次的に応急及び復旧工事を実施して対応をしてきたが、近年の崩落の度合いは著しく、このままでは、城跡の形態が大きく変化する可能性が高いことから、早急に法面全体の保護策を講じる必要に迫られた。よって、平成12年度には「都於郡城跡法面保存整備基本設計」を策定し、平成13年度から国庫補助を受けて年次的に法面の保存整備を行なっている。

一方、都於郡城跡は中世の日向一円を支配した伊東氏累代の本城であり、五城郭を中心に周囲の曲輪からなる繩張りが良好に保存されていることから、平成12年9月には宮崎県では初めて国の史跡として指定を受けている。このことは、歴史的にも貴重な文化遺産として認められたことを意味しているが、反面、その活用（保存整備）については具体的な方向は示されておらず、構想の域を脱していないのが現状であった。

このようなことから、五城郭を中心に周辺に位置する出城跡等も含めた基本計画を策定することとなり、城跡の性格や機能を解明することはもちろん、保存整備のための基礎データを蓄積するための発掘（確認）調査を実施することとなった。

調査は、昨年度に継続して二ノ丸跡の平面部にトレンチを設定して行った。

第2節 調査の体制

| | | |
|------|-----------|-------------|
| 調査主体 | 西都市教育委員会 | |
| | 教 育 長 | 黒 木 康 郎 |
| | 文 化 課 長 | 阿 万 定 治 |
| | 同 補 佐 | 奥 野 拓 美 |
| | 同 主 事 | 鹿 嶋 修 一 |
| | 同 主 事 | 釜 潤 明 宏 |
| | 同 主事補 | 津 曲 大 祐 |
| 調査員 | 文 化 課 係 長 | 義 方 政 幾 |
| 調査指導 | 日 高 正 晴 | (西都原古墳研究所長) |

第Ⅱ章 都於郡城跡の概要

第1節 遺跡の位置と歴史的環境

西都市は、九州山地を源流とし日向灘に注がれる一ヶ瀬川中流域に位置し、南部は一ヶ瀬川とその支流である三納川と三財川とが造り出した西都平野となっているが、その間には九州山地から幾状にも延びた洪積層台地が列になっている。

九州山地に属し国見山を源流とする三財川は、山地内では南東方向に流路をとるが、平野部に出ると大きく蛇行し、北方に流路をとり三財川と合流する。この三財川下流域の流路が北に向かう地点の東に展開する都於郡台地の北西端に都於郡城の主体部（五城郭）がある。山城様式に構築されたこの城は、平地に孤立した自然の山丘を城取りしたもので、標高100m前後である。周りは急峻な断崖となって水田につながり、裾部には三財川が流れて外堀の役目を果たしている。

本城跡の西方約900m、三財川を隔てた対岸台地（小豆野原台地）上には、縁辺部を中心に三財古墳群が分布している。

都於郡台地の東面は、一部は裾部に水田が広がり、延長した台地の東方に佐土原城跡を望むことができる。南面には無数の小丘陵地が連続しており大淀川流域の地形に繋がっている。北面は、国指定の茶臼原古墳群や穂北城跡が分布する茶臼原台地、そして、その南側には国指定の新田原古墳群が分布する新田原台地、さらに、同台地西側の平野部には市街地を眺望することができる。

都於郡城跡の主体部は、「本丸跡」・「二ノ丸跡」・「三ノ丸跡」・「西ノ城跡」・「奥ノ城跡」の5つの曲輪からなっており、通常は「五城郭」と称しているが、遠くから見た様が舟が浮いているように見えることから別名「浮舟城」とも呼ばれている。その範囲は、南北約260m・東西約400mにも及んでいる。この五城郭は、

中世の山城の曲輪の雰囲気を伝えており、輪郭や腰曲輪、帯曲輪と主要な曲輪との相互関係はかつての姿を維持している。また、主要曲輪の外側周辺には、「東ノ城」「向ノ城」

「南ノ城」「日隱城」などの出城跡や大用寺・岳惣寺・一乗院・定徳院などの寺院跡が分布している。また、伊東墓地や都於郡城の城下町であつた都於郡町には短冊型地割が認められる。いずれにしても、都於郡城は日向一円を支配した伊東氏星代の本城であり、熊本の菊池城などと共に中世期を代表する貴重な歴史遺産である。

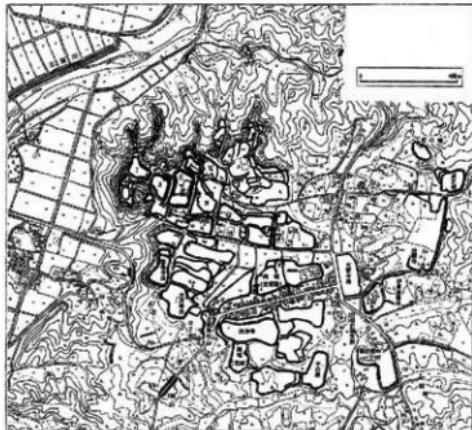


Fig.1 都於郡城跡図 宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書・より転載(八巻孝夫原図作成)



1. 特別史跡・西都原古墳群 2. 新田原古墳群
 3. 寺崎遺跡（日向國衙跡） 4. 日向國分寺跡 5. 日向國分尼寺跡
 6. 松本塚古墳 7. 都於郡城跡

Fig. 2 都於郡城跡 周辺位置図

第三章 調査の方法と概要

第1節 調査区の設定と概要

調査は、都於郡城跡の性格や機能を明確にすること、そして、今後の保存整備データ蓄積のため年に年次的に実施している。本年度は、昨年に継続してニノ丸跡の平面部に4本のトレチを設定して行った。

ニノ丸跡は、五城郭の中心に位置し、本丸跡とは大空堀を隔てた西側に遺存している曲輪である。また、ニノ丸跡は本丸と比較して古い時期に築城され、現在は南側の西寄りから登るようになっているが、虎口としては南側の東寄りが登り口ではないかと考えられている。さらに、北側及び南側には、この曲輪を防衛するかのように帶曲輪が付随している。規模的には、東西95m・南北85m(中心部)を計り、東側には幅4m・長さ75m・高さ約2.5~3.6mの土塁を有している。

トレチは、南側を中心に4カ所設定し、昨年度の調査結果を踏まえたうえで、遺構の遺存状況や土塁の構築状況等の把握を行った。

調査の結果、多数の柱穴群をはじめ構造遺構や虎口に関連した遺構等を検出した。この中で注目されるのは、虎口に関連した遺構で、調査では初めての検出である。虎口は、西から東に登るようになっており、その登り詰めた周辺を検出した。このように、虎口に関連した遺構をはじめ多くの遺構・遺物を検出したことにより、少しずつではあるが都於郡城の性格や機能が解明され、保存整備をするためのデータが得られることは大きな成果であった。

第2節 調査の記録

1. 遺構と遺物

《柱穴群》(Fig. 5・7)

柱穴については、第5トレチを中心に各トレチから多数検出した。結果、何回も建物が建て替えられたことを示すように重複しているのは確認できたが、残念なことに狭い範囲のトレチ調査であったことから、建物等を特定するまでには至らなかった。

この中で、注目されるのは第6・7トレチから検出した大きな長方形及び方形の柱穴である。特に第6トレチ(P356)と第7トレチ(P354)に東西に並行して検出したものは、虎口関連遺構を登り詰めた地点にある。いずれも長方形を呈し、この柱穴間は中心で3.40m、規模的には、それぞれP354が長軸1.55m・短軸1.26m・深さ1.90m、P356が長軸1.28m・短軸0.75m・深さ1.38mを計る。さらに、P356には径0.33mの柱痕が確認されることから、門柱跡ではないかと推定されるが、もっと違った重要な意味がある遺構の可能性も指摘されており、今後の研究課題として慎重に取り扱っていかなければならないと考える。

第7トレチの大型の柱穴(P355)は方形で、P354に隣接しているが、埋土状況がP354とはかなり異っており、また、共伴遺物も若干新しいことから同時期のものではないと推定される。規模的には、長軸1.30m・短軸1.26m・深さ1.99mを計る。使用目的については不明である。

遺物は、土師器が主体で、その他染付・陶器・古鏡等が出土している。

《虎口》(Fig. 5・7)

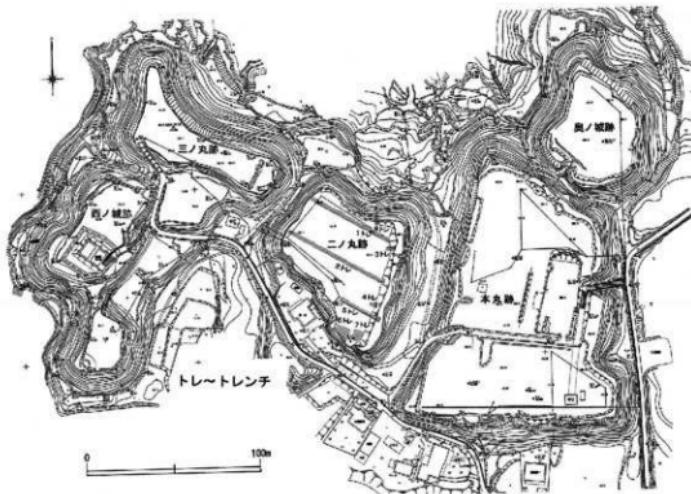


Fig. 3 都於都城跡（五城郭）現況及びトレンチ配置図（平成13・14年度）



平成13年度 第1～4トレンチ

平成14年度 第5～8トレンチ

Fig. 4 二の丸跡トレンチ内構図（平成13・14年度）(S=1/800)

第6トレーニチから第7トレーニチに向って西から東に登るように延びており、そして、第7トレーニチでは90度北に折れ曲がり、最上部曲輪の平坦地に至っている。幅は第6トレーニチでしか確認できないが上幅3.40m・下幅1.80m、深さは第6トレーニチの西側で1.40m、東側で0.57m、第7トレーニチで0.33mを計る。この虎口と溝状遺構との関係は、溝状遺構が虎口を切っており、時期的には虎口が古い段階のものであると判断される。

遺物は、土師器をはじめ青磁・染付・陶器・古銭（洪武通宝）等が出土している。

《溝状遺構》(Fig. 4・5)

溝状遺構は、第5～7の各トレーニチから3条検出している。1号溝状遺構は2号溝状遺構によりそのほとんどが掘削されており、セクション（土層断面）で一部分しか確認できない。3号溝状遺構は、規模的にも小さく、表土面から浅いことから、第1次の整備以前の畑として使用されていた頃のものであると考えられる。このなかで、2号溝状遺構については、昨年度も検出したものと同じもので、土星の形に沿ってほぼ等間隔で延びているものである。規模的には、1号溝状遺構は、幅0.70m・深さ0.15m、2号溝状遺構は、幅1.65m・深さ0.45m、3号溝状遺構は、幅は不明・深さ0.20mを計る。時期的には1号溝状遺構が最も古く、2号溝状遺構、そして3号溝状遺構の順に構築されたものと推定される。これら溝状遺構とその他遺構との関係は、溝状遺構が柱穴群を切るように延びており、また、虎口も切っていることから、このなかでは新しい遺構ということになる。

遺物は、土師器・青磁・白磁・染付・陶磁器等が出土している。

《土 墓》(Fig. 6)

土星の堆積状況を確認するために2本のトレーニチを設定して掘削を行った。第5トレーニチでは、土星があまりにも高く危険なため一部の調査に留まつたが、少なくとも2時期に分かれることが判明した。内側の土星は下位しか確認できない（P.L. 2・4）が、堆積上に混ざりけがなく、自然層を掘り下げて構築された可能性がある。つまり、平坦部全体を低くすることにより土星に高さを持たせ、さらに、その上に土を積み上げたことが想定されるが、今回の調査ではそこまで確認するには至らなかった。外側の土星は、内側の土星に覆い被さるように堆積している。法面であることから崩落していることも確認されるが、堆積状況は内側の土星とは全く異なっており、土質は粗く、雑に積み上げられている。第8トレーニチの土星は、積み上げたというより、ただ土を盛り上げて構築されたようで、第5トレーニチの土星とは全く様相を異にしている。

遺物は、土師器等が出土している。

昨年度のニノ丸跡の調査で、遺構の関係ではっきりしていることとして、①大型の方形柱穴の深いタイプのものは上巣が構築される以前に掘られたものであること。②溝状遺構は東側は上巣に沿って、北側と西側は土星の幅と等間隔で、しかも、ニノ丸の地形に沿って延びていること。③溝状遺構と柱穴群では、柱穴群の方が古いこと、④土星と溝状遺構の関係では、同じ時期か土星の方が古く構築されたこと。などを挙げたが、今回の調査で、⑤溝状遺構は3時期に分かれること。⑥溝状遺構と虎口は同時期のものではなく虎口のほうが古いこと。などが判明した。遺物は、客土及び埋土からのものが多いが、土師器は器形の特徴などから13世紀から15世紀頃のものである。

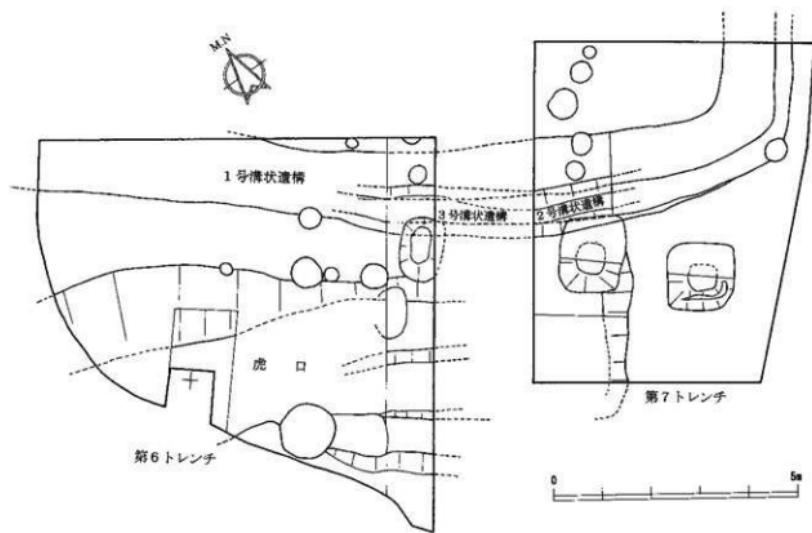


Fig. 5 第6・7トレンチ遺構平面図 (S=1/100)

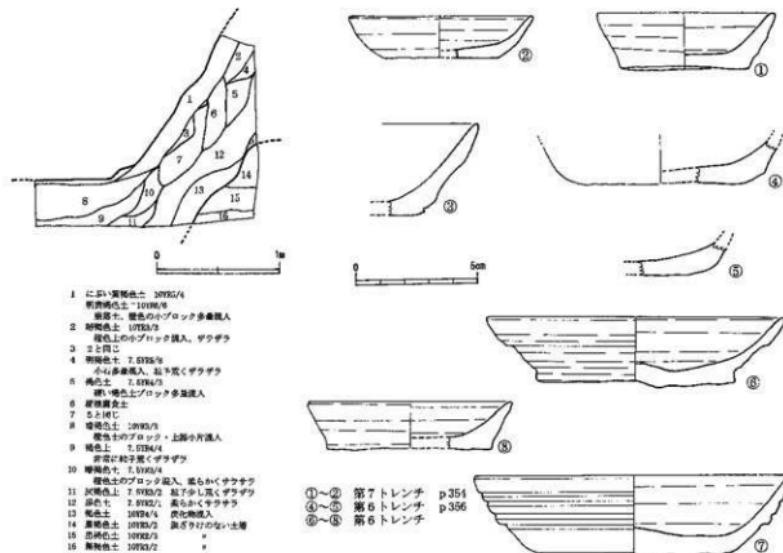


Fig. 6 第5トレンチ内構造断面図 (S=1/40)

Fig. 7 出土遺物室実測図 (S=1/2)

第IV章 ま と め

宮崎県内において、中近世の城館跡に関する発掘調査については、清武の通称「ニの丸」地区の城内遺跡⁽¹⁾、宮崎学園都市遺跡群車坂城⁽²⁾をはじめ、近年では串間市櫛間城や都城市都之城、安永城などが行わっている。これら、城館跡からは、多数の柱穴の他、掘立柱建物跡や道路、鐵治工房跡などが検出され、構造の把握に繋がる重要な成果が得られている。また、県教育委員会においては、平成10年度には県内すべての城館跡について構造や沿革等時間的・機能的に把握した報告書がまとめられ、今後の城館跡研究の大きな役割を果たしている。

このような中、都於郡城跡では、昭和64年に本丸跡の発掘調査（トレーナー）⁽³⁾が行われた。この調査で、多数の柱穴や凹形・方形状土壙が検出されたものの、建物跡を特定するには至らなかった。

今回の調査では、多数の柱穴や溝状遺構を検出したが、特筆されるのは、調査で初めて虎口に関連した遺構を検出したことである。一部分ではあるものの、これまで、奥ノ城の虎口以外はっきりとしたことは解っていないことから、虎口を特定できたことは大きな前進である。さらに、これに付随して今後の研究課題であるが門柱跡ではないかと推定される長方形状の柱穴も検出しており、当時の状況を知り得る非常に注目される遺構である。

そして、柱穴・溝状遺構・土星それぞれの関係については、前途したように様々なことが判明した。この中で興味あるのは、溝状遺構と土星の関係で、溝状遺構は3時期、土星は少なくとも2時期に分かれることが判明した。1号・2号溝状遺構は内側の土星に、3号溝状遺構は外側の土星に沿って延びていることが十層断面から窺える。このことから、1号・2号溝状遺構が土星に沿って構築されたものであれば、昨年度の調査結果を踏まえると、現在よりも小さくて低い土星が北側及び西側にも存在していたことになる。もしうそであれば、二ノ丸は本丸と比較して占い時期に築城されたと言われており、現在、本丸には上界が全体を巡っていることから、本丸が築城される以前は二ノ丸がその役目を担っていたと思われ、それが、本丸が築城された段階で本丸に移り、二ノ丸は本丸が攻撃された場合の防衛の最前線の曲輪とするため土星東側を強化したのではないかということが想定されるが、まだ推定の域を脱しておらず、このことも今後の研究課題である。いずれにしても、都於郡城が必要に応じて造成され成長しながら現在の姿になる過程の中で構築されたり、消滅したりしたものと考える。

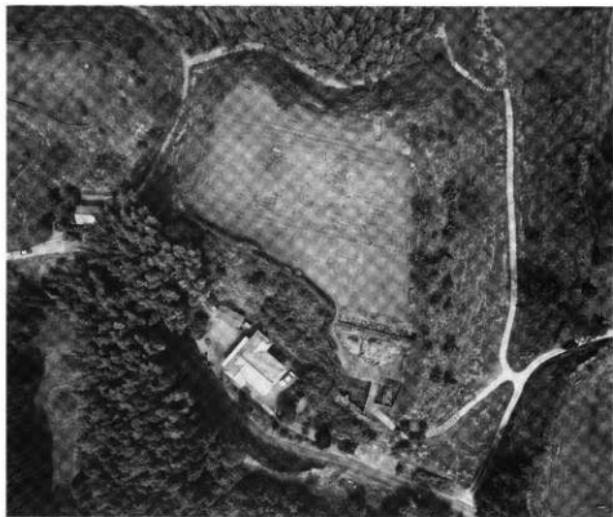
このように、今回の調査で、少しづつではあるが都於郡城跡の構造を解明することができた。しかし、反面課題も多くあり、今後調査していく中で検討していかなければならぬと考える。

註

- (1). 宮崎県教育委員会「城内遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』(3) 1980
- (2). 宮崎県教育委員会「車坂遺跡」『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』(IV) 1987
- (3). 宮崎考古学会「宮崎県南部における中世城郭の一例—串間市櫛間城—」『宮崎考古』13 1994
- (4). 都城市教育委員会「都之城跡（主郭部）」『都城市文化財発掘調査報告書』第13集 1991
- (5). 都城市教育委員会「金石城跡」『都城市文化財発掘調査報告書』第19集 1992
- (6). 宮崎県教育委員会『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書』II 1999
- (7). 西都市教育委員会「都於郡城跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第5集 1988



1. 都於郡城跡全景（空撮・南東より）



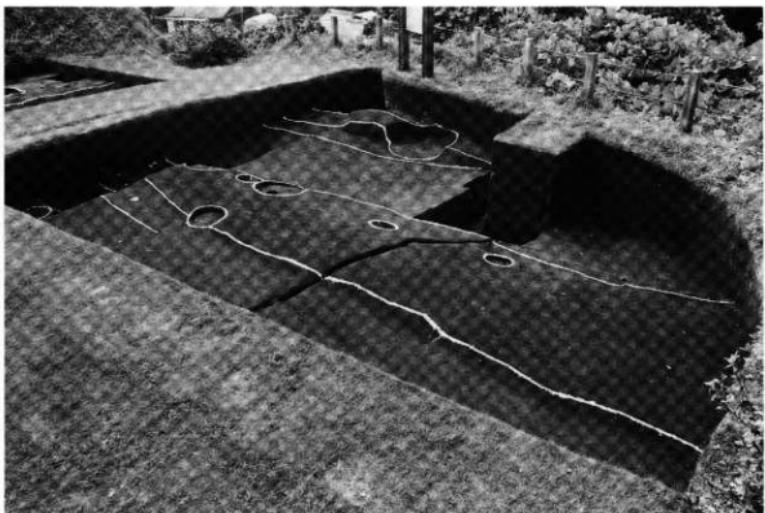
2. ニノ丸跡全景（空撮・真上より）



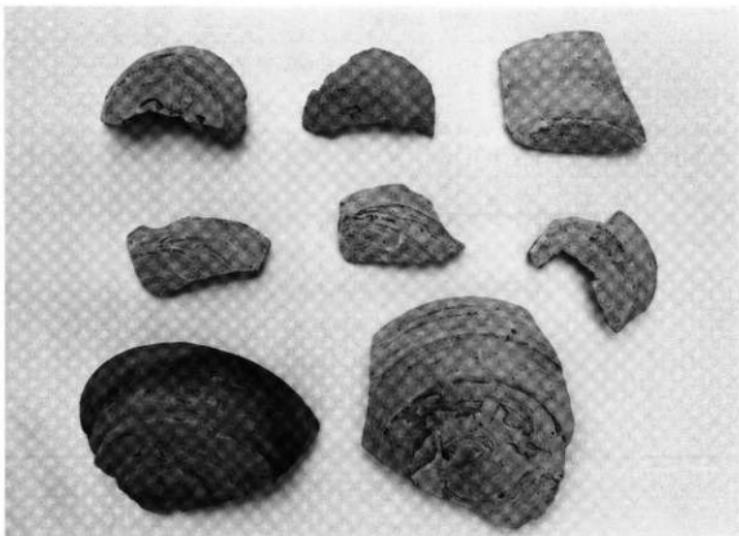
3. ニノ丸跡遺構分布状況（空撮・真上より）



4. 第5トレンチ墨検出状況



5. 第6トレンチ虎口関連遺構検出状況（北西より）



6. 出土遺物

報告書抄録

| ふりがな | とのこおりじょうあと | | | | | | |
|---------------------|---|------|-------------------|--------------------------------|------|----------|---------------------------|
| 書名 | 都於郡城跡 | | | | | | |
| 副書名 | 都於郡城跡発掘調査概要報告書 | | | | | | |
| 卷次 | 第2集 | | | | | | |
| シリーズ名 | 西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第35集 | | | | | | |
| 編著者名 | 農方政幾 | | | | | | |
| 編集機関 | 西都市教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒881-8501 宮崎県西都市聖陵町2丁目1番地 TEL0983-43-1111 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2003年3月30日 | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 (m ²) |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | |
| とのこおりじょうあと 都於郡城跡 | みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおむらなかかざとのこおり 大字荒武字都於郡 | 5002 | | X=-104363.790 Y=35388.620 | | 20020702 | |
| | | | | X=-104551.238 Y=35554.076 | | 20030109 | 140 |
| 調査原因 | 種別 | 主な時代 | 主な遺跡 | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 保存整備データ蓄積に伴う確認調査 | 城跡 | 中世 | 土壘・虎口 柱穴群・溝状造構 | 土師器 輸入陶磁器 (青磁・白磁) 陶磁器 | | | |

『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第35集

「都於郡城跡発掘調査概要報告書」

平成15年3月31日発行

編集発行 西都市教育委員会

印刷所 吉永印刷
